

特集 ■ 人とまちをつなぐ駅の今とこれから

「駅」といえば、古くは街道に置かれて馬を乗り継ぎ、物を中継するための場所を意味していましたが、現代においては鉄道の乗降場として位置づけられています。駅は、鉄道という交通インフラにおいて欠かせない要素であるとともに、建築物や公共空間としての側面も持ち合わせます。また、都市の成り立ちにおいて重要な意味を持つ場所であり、都市計画とも密接に関係する要素であり続けてきました。

近年、その駅を取り巻く状況は、駅が立地する「まち」において、それぞれ異なる様相を呈しています。人口が集中する都市では、「働く」「遊ぶ」「暮らす」をより高度に集積させる駅周辺再開発により、駅への求心力を増す事例がある一方で、郊外化が進む都市では、かつてそこに暮らす人々の生活や意識の中心であったはずの駅を再生しようと試みている事例があります。

そこで今回は、大阪・関西万博の開催を控えて大規模な市街地再開発が進む大阪駅の事例や、駅周辺の土地区画整理事業を契機とするコンパクトシティ構想などにより、駅をまちの拠点として再活性化する地方都市の事例について紹介します。さらに、駅とまちの計画・整備・維持管理に至るプロセスを「デザイン」としてまとめた取り組み、長年親しまれてきた駅を保存活用することにより駅周辺の活性化を目指す取り組み、鉄道駅概念から派生して元々の意味に近づいたともいえる「駅」により地方創生を目指す取り組みなどにも着目します。それらを通して、人とまちをつなぐ駅について再認識すると同時に、その可能性と未来への期待について考えていきたいと思います。